

水のイメージについて

千野 美和子

心理療法において、夢や、遊び、箱庭表現の中に、水のイメージが現れることがある。その水のイメージに注目して、心理療法のプロセスをみると、意味深い展開が生じていることが多い。イメージは、多義性を持つものであり、水のイメージといっても、多様である。しかし、その中に、筆者はこころを治癒する治療的イメージが存在するのではないかと考える。本論文では、水の創世神話と、Eliadeの水のシンボル、Bachelardの物質的想像力としての水を概観し、次に、心理療法に関わって述べられる水のイメージについて、Jungを中心に、治療的イメージを探る。

キーワード：心理療法、水、イメージ

1. 水と心理療法

水という物質は、空気とともに、私たちの周りに存在するきわめてありふれたものである。水の歴史は、地球の歴史よりも古く、もともと地球に衝突してきた隕石の中に含まれていた水分が、大気中に蒸発し、水として生き残ったものである（平澤，1999）。そして、現在地球上のほぼ4分の3の面積を、沼、湖、川、海などの形で水がおおっており、地下には地下水という形で水が蓄えられている。また、人間をはじめ、地球上に生きる生物の身体の大部分は水からできており、その身体を維持する上で、水が重要な働きをする（鈴木，1980；志村，2004）。その上、生きていくためには常に水を外部から供給しなければならない。このように、日常の生活から、水を見た場合、身近な存在であるとともに、生きていく上で欠くことのできない非常に重要な物質であることがわかる。

さて、水は、心理療法においても、重要なテーマとなって現れることがある。たとえば、遊戯療法で、子どもが実際の水を使い、「水の遊び」が展開する。クライアントが報告する夢のイメージとして、「水のイメージ」が展開する。また、箱庭表現の中で「水の表現」がテーマとなって展開する。表現手段は異なるにせよ、いずれも水を中心に、意味深い表現が生じ、治療が進展する。そのような時、筆者は水イメージのもつ治療的意義を感じるが多い。もちろん、個々の事例において、水イメージの意味するところは異なる。また、イメージの特徴としての多義性もある。しかし、その多義性の中に、癒すイメージが存在するのではないかと考える。

本論では、創世神話をはじめ、いくつかの立場から述べられる水のイメージを概観し、そのイメージの持つ治療的意味について考察することを目的とする。

2. 創世神話にみる水

まず、水というものが、人間の心にとっても、いかに根源的なイメージをもつものであるかを

創世神話からみていきたい。

吉田(1999)によると、原初の世界が、水または海でおおわれていたというイメージは、世界中の神話に共通してみられるという。ここでは、日本神話と旧約聖書の始まりについてあげてみたい。

日本の神話である『古事記』では、「天土初めて発けし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。」と天と地が初めて分れた時に、成った神を述べるところから始まる。そして、「次に国稚く浮ける脂の如くして、海月なす漂える時、葦牙の如く萌え騰る物によりて」成った二柱の神から、順々に成った神を述べる。その最後の神と成ったのが、伊邪那岐、伊邪那美の神である。神が揃った時、「ここに天つ神諸々の命もちて、伊邪那岐命・伊邪那美命二柱の神に、『このただよへる国を修め理り固め成せ』と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。かれ、二柱の神天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして画きたまへば、塩こをろこをろと画き鳴して引き上げたまふ時、その矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。これ淤能碁呂島なり。」(次田, 1977)。

オノゴロ島ができる前の国土は、水に浮く脂のような状態でくらげのように漂っていたという。また、『日本書紀』には「遊魚の水の上に浮けるがごとし」の喩えにもみられるように、天と分れた地はこのようにまだしっかりと固まっていない状態であり、はっきりと言及されていないが、これら喩えから、水あるいは海のようなものの上に漂っていたと考えられる。伊邪那岐・伊邪那美が国生みをする以前、天地分れて、初めての神となった時より、水または海がすでにそこにあったことになる。

また、『旧約聖書』創世記の天地創造は以下のような書き出しで始まる(『聖書新共同訳』より)。「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。神は言われた。『水の中に大空あれ。水と水を分けよ。』神は大空を作り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。神は言われた。『天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現われよ。』そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。」

旧約聖書の天地創造では、神の創造前にすでに水が存在していることがわかる。水は天と地に分けられ、地の水は海と名づけられる。その後、天の水の言及はないが、天地創造の時、神は地上に雨を送らなかったが、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤したという。その後大洪水の話が続く。

日本神話と旧約聖書の創造のありようは異なる(河合, 2003)が、どちらも神が創造する以前から、水が存在する。神が生み出す前から、原初に存在するものが水なのである。水は神とともにある。

その他にも、原初に存在したのは、水だけであったと述べる創世神話が多い(吉田, 1999)。たとえば、原初にはヌンと呼ばれる、大洋だけが存在したという古代エジプトの神話。原初に存在したのはただ、男神である真水のアプスーと、女神である塩水のティアマトだけだったというメソポタミアの神話。原初には世界は、ただ一面の海原で、その海面を大気の娘の女神が、波に運ばれながら漂っていたというフィンランド叙事詩。世界のはじめには、暗黒の中に広漠として大洋が広がり、その上に大神のヴィシュヌが、眠っているというヒンズー教の神話がある。

このように、創世神話の原初からすでに存在しているものとして、水がイメージされ、根源を表わすものとしてのイメージをもつ。それは、海から生物が生まれたという地球の歴史と重なる。最後に、ゲルマンの創世神話（吉田，1987）をあげる。

「原古にはまだ、天もなければ地も海もなく、ただ底も知れぬ巨大な虚無の深淵ギンヌンガガップだけがあった。その南北の果てにそれぞれ、真に壮絶な世界ならぬ世界ができた。北の果てにできたのは、常に暗黒の霧に鎖され、厚い氷と霜に覆われて、猛烈な突風の吹き荒ぶ、極寒の世界ニフルヘウムで、その真ん中にフヴェルゲルミルの泉が湧き、そこからこんこんと迸り出る水が、11の河になって流れ出ている。河の水は、水源から遠ざかるにつれて氷となり、ギンヌンガガップの深淵に積み重なっていく。」この氷に南の果てにできた世界から飛び散る火花があたり、巨人が誕生する。そこから世界が始まる。

はじめにただ深淵しかない世界にできた世界は壮絶な二つの世界であるが、その一つの世界の中心には泉がわき出ており、そこからこんこんと水が迸り、河となって流れ出る。

物質としての水が物質としての人間にとって根源的なものであるとともに、われわれのころらにとっても根源的なイメージとして水は存在している。それゆえに、こころに根源につながるイメージが必要なとき、水のイメージが現れるのではないだろうか。

3. ヒエロファニーとしての水

Eliade (1974) は、宗教学の立場から、聖を顕わすもの（ヒエロファニー）の一つとして水を取り上げ、水が象徴するものを次のように述べている。

「水は形のさだかでないもの、潜在しているものの原理として、あらゆる宇宙顕現の原基として、あらゆる芽生えの容器として、一切の形が発生してくる原初の物質を象徴している。」この章では、彼が論述する水の象徴についてまとめる。

前節で述べた「創世神話にみる水」について、彼は「水による宇宙創成」として初めに取り上げる。インド創成神話の例をあげ、そのいずれの伝承も、「原始の水」から、宇宙木や白蓮などの世界が生じると語る。しかし、大地を表す象徴から世界が現れることは決してないと断言する。大地より先に水は存在するのである。そして、以下のように結論する。「水はあらゆる創造、あらゆる『堅固に確立したもの』、あらゆる宇宙的な顕現に先行し、それを支えているのである」。

水から世界が生じた、あるいは世界が生ずる時そこに水が存在し、世界の誕生に立ち会うというイメージはこころにとって共通のイメージであり、この基本イメージからさまざまなイメージが生じる。彼のいう「芽生えの器」としての水のイメージである。

次に出てくるのは、人は水から生まれたというイメージである。「水は万物の母胎、そこにはあらゆる潜在的形質が存続しており、あらゆる生命の萌芽が繁茂している」それゆえ、「水から人類や特定の人類が発生した」という神話や伝説も多い。水から誕生するのは宇宙であり、人類である。水は宇宙という次元において、また人類という次元において、最初のを生み出す。それが、人間個人という次元になると、水は子どもを生み出すというものになる。すなわち、水は子どもを授けてくれるという信仰である。婦人が子宝を祈願する「母水」信仰や、不妊の女性を妊娠させる「子どもの井戸」などが各地にあるという。水から、宇宙、そして、最初の人類が生まれたという神話時代のことだけではなく、現在においても水は子どもを生む力があるという信仰が受け継がれている。

生命の水というイメージ。「宇宙創造の象徴で、あらゆる生命の萌芽の苗床である水は、すぐれて、呪術的で薬効のある物質となる。」この水を飲む、あるいは水に浸れば、病が治る、若返る、永遠の命を手に入れることができるというものである。それは「水の中には生命、力、永遠が存在する、という同じ形而上学的、宗教的実在を神話学的に表現したものだ」という。物語では、この水はたやすく手に入れることはできず、それを手に入れるための旅や試練が必要である。そして、現在では、病気を癒す泉、川という信仰は根強く存在し、ルルドの泉など巡礼する聖地となっている。特別の水が何故このような効力をもつかについて、彼は、「初水（はつみず）」を取り上げて説明している。「穢れていない新しい水差しに入っている水で、それは原始の水の生命発生的な創造的価値をその中に濃縮して含んでいる水である。この水が治癒力をもつのは、ある意味で『創造』をもういちどくりかえすからである。」そして、民間療法の「初水」の使用は「原初の物質に接触させて、病人を呪術的に再生させようとはかる」もので、「その際、水はあらゆる形を同化し、崩壊させるその力によって、病を吸収してしまう」という。ここでは「芽生えの器」としての生み出すイメージとともに、「あらゆる形を同化し、崩壊させる」イメージが包含されている。

水が浄めるというイメージ。「水にはあらゆるものが『溶け』、どんな『形』もくずれてしまい、どんな『歴史』も存在しなくなってしまう。以前に存在していたものも、水に浸してからは存在しなくなる。」そして、水に浸すことは、人間的次元では死に相当し、「水に浸されたものは『死に』、それから水から再び起き上がり、子どものように罪も『歴史』もなくなり、新しい啓示を受け入れ、新しく『本来の』生をはじめることができるようになる。」という。このような水による浄化、水による再生があるのは、「水が歴史を無に帰して、たとえほんのいつときでも原初の完全な姿を見せてくれるからである」。それゆえに、宗教的行為が行なわれる前に水で身を浄める洗浄式や、罪を浄め、生まれ変わる手段としての浸礼や洗礼などの宗教儀式が存在する。水の象徴の基本テーマである「創造をもう一度くりかえす」という再生のイメージとともに、創造の前の状態に戻す、その歴史や罪も含めて形あるものを無にする水のイメージが強調される。水に浸すことは、創造されたものを創造前の状態に戻し、そこから新たな創造を期待するものであるかもしれない。水に浸すことで、まさに死と再生が行なわれるのである。

この水に浸すことを宇宙的次元でみると、洪水であるという。「洪水伝説のほとんどすべては、人類が水に再び吸収されてしまうという観念、そして新しい人類とともに新しい時代が開始される」というものである。そこにあるのは、水への再吸収と周期的発現という循環概念である。「水は一切の創造に先立ち、また創造を周期的に回復して、創造をもう一度やりなおし、それを『純化』し、同時に新しい潜在的形質をもってそれを豊かにし、創造を再生させる」のである。ここで、再度「『創造』に先行して『創造を』再吸収すること」が強調される。洪水や氾濫は今まで創造されてきた世界を押し流し、跡形もなく消し去ってしまう。それがあってこそ新しい世界が創造される。

水はこのように宇宙的規模における「創造」をつかさどる。世界の誕生と消滅が水を通して行われるのである。それゆえにこそ、水は聖なるものとされる。この根源的イメージから、癒すイメージが生じていると思われる。そして、水そのものの信仰へとつながっていくのである。

水そのものの礼拝、泉や河川の信仰についても、宇宙創造的要素としての聖なる価値と、泉や川のもつ独自の性質に基づいている。すなわち「水は流れ、水は『生きて』おり、水は動いている。水は靈感を与え、癒し、予言する。泉や川はそれ自体として、力、生命、永続性を顕示している」。

神託は水のほとりで告げられ、予言者は聖なる水を飲んでから予言する。そこあるのは予言の力は水から発するという古代の信仰である。また、泉に祭司が供犠すると雨が降り始める。力は泉にあり、特別の儀礼によってその力が発動されると信じられている。

また、他のヒエロファニーとのつながりについて、「芽生えを豊富に含んだ水は大地、動物、女性を豊穡多産にし」、そのことから「月」と同一視されるという。先史時代より水＝月＝女性は人間と宇宙の間の「豊穡」の循環回路とみなされてきたという。

次に、心理療法に現れるもう一つの重要なイメージである土（大地）と対照させて考えてみたい。まず、前述したように世界の創造は水から生じ、大地からは生じない。また、「大地の使命はたえず産出すること、大地にもどって、自動力を失い、不毛に陥っているものすべてに形と生命とを与えることである。水は一切の宇宙の出来事のはじまりと終わりに存する。大地は一切の生命のはじめと終わりに存する。生命の発現はすべて大地の豊饒性によっておこる。水の神話的使命が、何十億年にもわたる宇宙的、永遠の循環のサイクルを開き、また、閉じることでありとすれば、大地の使命は、一切の生物の形態、または局地的な歴史に属する形態の最初と最後に立ち会うことである」という。

つまり、大地は生命を生み出し育むが、大地を豊穡にするのは水である。水が存在しなければ、大地は豊穡にならず、不毛のまま、何も生まれぬ。大地が生命を産み育てるためには水が必要である。また、大地は生命的次元で世界を見ているが、水は生命である人間的次元を超えたより広い宇宙的次元において世界を見ていることがいえよう。関係の深い大地と比較することによって、水の聖なる特徴がいつそう明確になったと思われる。

4. 物質的想像力としての水

Bachelard (1942) は、違った視点から、水についてのイメージを考察する。物質的想像力とは、彼によると「存在の根源を掘り下げ、原初的なものと永遠なものとを同時に存在のなかに見出そうと望んでいる」「物質的要因に生命力を与える」想像力という。彼は、古代哲学「物質の四元素」によって、物質的想像力を分類しようとした。物質の四元素とは、火、空気、水、土である。彼は水について次のようにいう。「火よりも女性的で均一である元素、もっと人目につかず単一であり、しかも〔他を〕単一化する人間能力の象徴である、一層普遍的な元素としての水」。彼は神話や心理学も援用するが、専ら考察の対象は詩人が描く水のイメージである。その水のイメージを通しながら、人間のもつ想像力について考察する。そして、実に多様な水のイメージが彼によってつむぎ出されるが、この節では、その中で、筆者が留めておきたいイメージとそれについての彼の考察をまとめておく。

水の反映のイメージについて、水を凝視すること、そこから生ずるイメージについて、水に映った自分の姿に恋したギリシア神話の主人公の名から名づけられたナルシスム。彼はナルシスに関わる詩を引用して、次のように考察する。ナルシスがみた自分の姿は、「物質である水」の鏡の中であった。物体の鏡と比較しながら、水鏡の特徴について述べる。すなわち、水はわれわれのイメージを自然化する。水鏡には、水の反映のもつ自然の深さや、この反映が暗示する夢の無限性があり、結果「泉の鏡は開かれた想像力の機会」となる。少しぼんやりし少し蒼ざめた反映は観念化の働きを暗示する。ナルシスは泉に映る自分のイメージを凝視し、自分の美について瞑想しながら、未来についても瞑想する。そして、それは自然による鏡占い、水占いにつながる。

そこには二重の眼差しが存在する。ナルシスは泉でただ自分自身の凝視に耽っているだけではない。そこに映されているのは森全体であり、空全体である。夢想することによって世界が描き出されていく。水に映し出されるものは外の世界でもあり、夢想された内の世界でもある。その循環の中で、「湖は大きい静かな眼」となる。意志をもって世界を見つめている眼、夢想しているのは、水であり、大地の真の眼であるのだ。

このように水は反映によって世界を二重にし、夢想家も二重にする。というのは、見ている者を新しい夢の経験に参加させるからである。反映されたイメージは幻影が現実を訂正する体系的観念化に従う。つまり、現実から接ぎ痕や悲惨さを落としてしまうのだ。

しかし、反映は水の表面だけではない。「深い水」を前に、視線を移し、水底を見、水の深みを観想することによって、自己の内面性の意識を深化させることもできる。

以上、反映についての彼の考察はきわめて詩的哲学的であるが、筆者の視点から以下のようにまとめておきたい。水の表面を見つめる場合も、深い水を見つめる場合も、そこに映しだされるものは実在の反映以上の反映が表現されている。水に顕れるのは、意志をもって世界をみつめる眼であり、深化した内面性の意識の眼でもあり、そのまなざしからみられた世界なのである。

水のもつさわやかさのイメージ。さわやかさは目覚めの力である。小川に手を洗うときに感ずるさわやかさは春の新鮮さとなる。さわやかさは、流れる水によって春に浸透する、甦りの季節全体を基礎づける。さわやかさは水の形容詞である。小川のさわやかな歌や自然の現実の声に目を覚ます人にとって、新しい毎日は誕生の力学をもつ。

澄んだ水が浄化を暗示するのにたいして、さわやかな水が暗示するのは更新であり、それは若返りの泉につながる。彼は、さわやかさという体感的イメージがいかにか若返りの泉に結びつくかを考察する。「人はそれぞれ、エネルギーに満ちた朝、家の中に冷たい水の金だらいという若返りの泉を所有している」。さわやかな水は、老いていくおのれを見る顔を目覚めさせて若くする。早朝、顔にかけられた水は、見るエネルギーを甦らせる。水は視覚を活動的にし、視線を行動に作り上げる。その時人は見ているものに若々しい新鮮さを付与するのだ。このようにして本来身体感覚であったさわやかさが、水に投影され、隠喩となって使用されていく。

若返りの泉には、水による治癒への希望が結びついていて、人間はエネルギーの目覚めによる治癒の最初の証明を泉に求める。というのは、水はその新鮮で若々しい実体によって、われわれ自身がエネルギーに溢れていると感じるのを助けてくれるからである。また、水は人間をエネルギーに溢れた生命において目覚めさせるのだという。

彼の考察するさわやかさは確かに本来明確な身体感覚であった。水に触れたとき、生き生きとした感覚が、体中を駆け巡る。それは私たちをみずみずしくする。つまり、若返らせるのだ。この水から感じるさわやかさが若返りの泉のイメージにつながるという指摘は、新たな水のイメージを展開させてくれる。聖なるものを象徴する水のイメージとは異なる、もっと身近かな、身体に結びついた水のイメージが存在する。私たちは水との長いつきあいの中で、水とつながる身体感覚を深く記憶に刻んでいる。水に触れたときのみならず、小川のせせらぎや溪流の水の音を聞いただけでも、みずみずしさが感覚として湧いてくるのである。直接水に触れずとも、水をイメージするだけで、同様のさわやかさを、身体感覚を伴ったイメージとして感じることができる。物質としてそこに存在していなくても、水は、イメージの世界で生き生きと動き出すことができるのである。

前節のヒエロファニーとしての水は、宇宙的視点からの水のイメージであり、両義性はあるも

の、水イメージのもつ否定的イメージがおもてに出てくることはない。ここでは、暗い水というイメージが取りだされ、次のように述べられる。「水は暗さを増し、そのため水は陰影を吸収してしまう。その時、水は飲まれる実体でなく、飲む実体なのであり、黒いシロップのように影をむさぼり飲む」。そこには深い無意識的特性としての異常な力があり、呑み込む水の底知れぬ恐怖が表現されている。

また、四元素の一つである土との結びつきについて次のように考察する。水と土の結合は捏粉(ねりこ)を生み出す。水は結びつきを解いたり、結びつけたりする。また、水は土と結合することによって大地に豊饒性をもたらす、植物の成育の力をもたらす。

もし、大地が水のない土であったとしたら、変化流動する砂でしかなく、安定した大地とはならない。大地を潤し豊饒とするのは、水なのである。土を結びつける水が存在することによって大地が象徴としての大地となる。この水と土との関係は、前節と同様、大地に対する水の上位性、すなわち、まず水があって大地があることを明確にする。

以上、Bachelardは物質的想像力という視点から、詩に表現される水について考察した。さまざまに表現される水のイメージは彼の主張する物質的想像力を証明し、かつ人間のもつ想像力の豊かさを表わす。しかし、その一方で、水の持つ特性、人間の想像力を水がいかに引き出しやすいかの顕れでもある。

彼は次のようにいう。人間の言葉は水と連続したある流動性をもち、それゆえに水のイメージを呼び求める興奮を与える。水は詩的現実なのであると。

5. 無意識としての水

この章では、主にJungの水についてまとめる。

Jungは無意識を象徴するものの一つとして、水を説明する。夢に表われた水に対して、「深い水は無意識を表わす」(Jung, 1968)。また、「海は光り輝く表面の下に予想もできない深さを隠しているから、集合的無意識の象徴である」と、海は、幻想ないし幻覚(無意識内容の侵入)の最も生じやすい場所の一つであると説明する(Jung, 1944)。「混沌たる原初の水の心理学的対応物は無意識である」(Jung, 1954)ともいう。

そして、「水とそのあらゆる形態、海、湖、川、泉などは、最も頻繁に見られる無意識の類型表現の一つであり、これは水と密接に結びついているルナ(月)的・女性的なるものがそうであるのと同じである。」(Jung, 1952)と水が月と女性につながりがあると、Eliadeと同様のことを指摘する。しかし、Jungはこの関連について次のように述べる。「水のもつ母の意味は、神話学の領域でもっとも明瞭な象徴解釈のひとつである。海は生成の象徴、と古代からいわれている。水からは生命が生じる。キリストもミトラも水から生じた。ミトラは川の流れとともに生まれた、と叙べられている。キリストはヨルダン川で『再生』を経験した。……母の像が投影されることによって、母のものである聖なる(ヌミノース)あるいは呪術的な特性がいろいろと水に付与される。そのすぐれた一例が教会の洗礼の水の象徴である。」と説明し、「夢や空想に現れる海ないし広い河や湖は無意識を意味する。無意識が(男性の場合とくに)意識の母ないし母胎と考えられるかぎり、水がもつ母の面は無意識の性質と一致する。したがって無意識も一主観段階で解釈すれば一水と同じく母の意味をもつ。」と結論づける(Jung, 1954)。

Jungが「水は無意識を表わす」と述べているのは、水が母を表わすからであり、それゆえに

母のもつ「聖なる(ヌミノース)あるいは呪術的性質」を水が持つようになったからであるという。つまり、母という強力なイメージがあり、そこにつながるものの一つとして水があり、無意識すらもその一つであると主張し、元型の一つとして「母」をイメージの中心に据える。Eliadeは女性=水としたが、ここでは水は様々な象徴の一つとして母を表わすものであり、水のもつ様々な豊かなイメージが母という大きなイメージに包括されて、水独自のイメージが失われてしまう。

また、錬金術におけるメルクリウスと水との関連を述べる箇所では水のイメージの変遷を述べる。その箇所を少し長いが引用したい。「けれどもメルクリウスがかくもしばしば水と比較されるもつと深い理由は、メルクリウスがその水との類似性のおかげで、水がそなえているあのヌミノースな特性のすべてを一身に体現している点にある。『神の水』と『永遠の水』という観念が、豊かな祝福をもたらす聖なるナイルの水がまだ存在していたはるかな昔から十八世紀に至るまで、錬金術を支配してきたのはそのためである。キリスト教の諸世紀が経過してゆくなかで水は、最初はグノーシス主義的・錬金術的影響のもとに、ヌース(nous=理性・精神・霊)の意義が与えられた。あの神聖なる容器クラテルがヌースで満たされたのであるが、その目的は意識を手に入れたいと欲する人間がクラテルによる洗礼の沐浴で更新されるためであった。ついで水は、一方では、『教義の水』の意義を、他方で奇跡を惹き起こす魔法の水の意義をおびることになる。そして、すでに非常に早い時期から存在した水とヒュドラギュルムないしはメルクリウス〔ともに『水銀』の意〕との同一視のゆえに、ヘルメス・トリスメギストスの伝統の全体が、いずれにしてもすでに昔からヌミノースな特性を有していた水の意義領域に引き入れられたのである。『万物の子宮にして乳母』という水の母性的な原初的側面が無意識とのほとんど類を絶したアナロジーを示していただけに、事はそれだけ容易に運んだ。このような道筋を経て『水』の観念は徐々に『母の原初の息子』としてはヘルメス哲学的精神〔霊〕であり、化学的肉体〔化学物質〕としては魔術的に調合される水銀であるところの、あの途方もないパラドックスに満ちたメルクリウスへと発展していったのであった。」(Jung, 1954a)

錬金術における水の重要性はユングの語るところであるが、その重要性がどこから来たのかがよくわかる文章である。水と水銀の同一視、それは水のもつヌミノースな特性から生じ、さまざまな意義を水が持つようになった、その変遷の流れの中でおきたことである。そのもともとは彼によると、水は母なる性質をもつというところから、ヌミノースな特性をもつようになったということであるが、いったんそのような特性が付与されると、母性的特性を超えた意義が水に付与されているようにも思われる。水はヌミノースな力を持ち、そこから「神の水」「永遠の水」「教義の水」となり、ひいては「魔法の水」にもなっていたのである。水のもつヌミノースな力が、ヌミノースな特性をもつ様々なものを引き寄せて、そのことが一層水のもつヌミノースな特性を強めたと筆者には考えられる。これはユングのいう「水と無意識のアナロジー」によるものであるが、別の箇所では、「この液体には無意識が投影されている」という(Jung, 1958)。この投影という言葉は、さまざまなものを映し出す水の特質が表現されている。

次に、さらに詳しく、無意識とのつながりで水を論じている箇所を挙げよう。宝を掘り出したと思うものは、内的人格(ゼーレ)の旅に、つまり水に到達するための旅に出なければならないという。この水とは、「暗い『心』を表わす生きたシンボルである」。これを説明するために、あるプロテスタントの神学者が繰り返し見た夢を取り上げる。「この人は夢の中で自分自身の深みに降りていき、神秘的な水に到達する。そしてここで『ベテスタの池』の奇蹟—天使が降りてきて水に触れると、その水は癒しの力を得る—が起る。水を生き返らせる奇蹟を起こすためには、

人間が水の方に降りていかなければならない。水は無意識を表わすために一番よく使われるシンボルである。谷の中の湖は無意識を表わしている。それゆえ水とは心理学的に言えば、無意識になってしまった精神（ガイスト）のことである。それゆえこの神学者の夢が言わんとしていることは、まさしく、彼が生き生きとした精神（ガイスト）の働きを、ベテスダ池における救いの奇蹟のように、水辺において体験することができるということである」（Jung, 1954b）。

ここでは、水が表わす無意識の、もう少し複雑な象徴について述べる。それは「暗い『心』を表わす生きたシンボル」であり、「無意識になってしまった精神（ガイスト）」である。それゆえにこそ、水を求める旅に出なければならぬ。無意識を象徴する水辺で生き生きとした精神（ガイスト）の働きを体験できるのである。私たちは精神（ガイスト）を求めるがゆえに、水の元に行かなければならぬのである。Jungのいう精神（ガイスト）とは、人間に生氣や活気、刺激や靈感を与えてくれるものであり、人格化されると、助言や助力を与える老人の像となることが多く、いわゆる老賢者といわれる存在に相当する（Jung, 1951）。水の癒しとは、まさに水となった精神（ガイスト）による癒しである。水に、精神（ガイスト）すなわち、活気や靈感を与えるものが内在するのである。

さて、Bachelardは水を凝視することについて考察した。Jungは同じ行為である、水を覗き込むことについて、以下のように考察する。それは自分自身へ向かうことと同義であるとして、「水鏡を覗くものは、まずとにかく自分自身のイメージを見ることになる。自分自身に向かう者は自分自身にあえて出会うことになる……自分自身の出会いは、何よりも自らの影との出合いを意味する。影とは、実際一つの細道、狭き門であり、深い泉に下降する者はこの苦しい隘路を避けることができない。人は自分自身を知らねばならないし、それによっておのれが何者であるかを知る。なぜなら死（門の誤字か一筆者）後に来るものは、聞いたこともない不確かさに満ちた、考えられぬような無限の広がりだからである。見たところ、そこには内と外、上と下、こことあそこ、私のものとあなたのもの、善と悪などないらしい。それが水の世界であり、そこではあらゆる生命が浮かび漂う」。影との出合いの後、無意識という不可思議な世界を体験する。そして「水を覗く者は確かに自分のイメージを見る。しかしその後、やがて生きた存在が浮かび上がる。」と次にアニマが顕れることをほのめかす。この文は、もとはJungの他の著書の内容であるが、水の夢との関連でこの著書から引用した。（Jung, 1987）

水を覗き込むことは、まさに自分の無意識を覗き込むことであり、水の深みに降りていくことは、無意識の深みに降りていくにほかならない。無意識の不可思議さを説く一方で、次のことを警告することを忘れない。すなわち、水底にある宝を手に入れようとしても、自分が何者であるかを忘れてはならない、どんなことがあろうとも意識を失ってはならない。漁師となり、水に泳ぐものを釣り針や網で捕えるのであると。水の世界が魅惑的であるがゆえに、その世界に溺れてしまう危険性を指摘する。ユングのこの指摘は適切である。無意識と向き合うためには、自我がしっかりしていないと無意識に呑み込まれる。水に溺れる、あるいは氾濫や洪水などの水のもつ危険性や破壊性は、無意識の力が大きくなり自我を脅かす危険や自我破壊の状態に喩えられる。それゆえ、水のイメージが出てきた場合、否定面を考慮しながら、慎重に関わる必要がある。

以上、Jungの述べる水についていくつか取り上げてみた。無意識を象徴するとされる水は無意識のエネルギーや生命力（リビドー）にも喩えられる。そして、変容の場として、治癒力や救済力を持つ。

最後に、ユング派分析家の論ずる水を紹介したい。Anderten(1986)は夢の中に現れる水を考

察するうちに次のようなことがわかってきたという。「私たちの魂の根本的なあり方が象徴的なイメージ表現をとる場合にはほとんど、水のイメージで表わされ」、「根源的な体験との結びつきが確立されたときには、多くの場合、水の夢はまったく消え失せてしまい」、「個性化過程の要所要所で、生き生きとした自然＝本性が新たに布置された生の内実に対する答えが必要となる場合には、水の夢が再び現れ」る。感情や生き生きした体験など、本質的に自分の中において実際に生きることができないものは、水のように形や形態のないままでありつづけるという（彼女は無意識的でコントロールのきかない感情を水のように形が定まっていなと表現する）。そのような状態の人が水の夢を見ると、水は決まって夢見手にパニックや不安、恐怖を引起す。しかし、今まで生きることができなかった自分の感情や人生を生きることができるようになると、水との関係は次第に変化し、積極的に水と関わろうとするようになるという。水を心地よいと感じるか、また不安を感じるかは、その人の意識の有り様に関わるようである。意識の有り様が変わることによって、かつて否定的であったものが肯定的なものに転ずるのである。

また、Hillman (1979) はソウルメイキングの立場から、水に対する恐れを、次のように解釈している。「水への恐れは、ソウルメイキングの一連のプロセスに取り巻かれ沈む恐れである。そして、それはソウルの立場からすれば喜びである」という。個としての人間つまり、自我の立場でみれば、恐怖など否定的に感じることも、ソウルの立場では、逆に喜びと肯定的に感じるのだという。彼のこの考え方は、筆者が3節でのべた水の視点に近いものがある。しかし、水の視点は、否定肯定を超えて、宇宙的次元で、世界があるように見ている。

6. 水のイメージするもの

生きている人間にとって、必要な物質である水。物質である水の特徴を調べることによって、人間、生き物、ひいては地球を維持し、守るうえで、水がどれだけかけがえのない物質であるかがわかってくる。そして、同様に、物質としての水を離れて、イメージの中にある水を探ることによって、水がこころを癒すイメージとして重要な意味を持つことが明らかになったと思う。

物質としての水とイメージとしての水は、決して別のものではなく、パラレルにつながっている。水は地球が誕生する以前から存在していたという事実は、筆者に微かならぬ感動を与えた。そして、人間のこころはまるでその事実を記憶しているかのように、創世神話を生み出しているのだ。

創世神話において世界の誕生を支える水は、宇宙創世に関わる存在として根源的イメージをもつゆえに、聖なるものとされる。このような聖なるものとしての根源的イメージを持つとともに、小川のせせらぎの音を聞いた時の心地よさや、水に触れた時のさわやかさなどきわめて身近で日常的なものとしての、体感的イメージをもつ。こころの次元で見れば、それは無意識であり、精神（ガイスト）をはじめ、元型とつながっていく。それは人間に豊かで底知れぬ想像力を付与する。水はこのように聖と俗の次元にまたがり、実に様々なイメージを担い、われわれの前に存在する。そこに存在する水は、様々な次元のイメージを内包するのである。

水の癒しとは、水のイメージと関わることで、水の中に内在するガイスト、すなわち、さわやかさ、生き生きしたものを自分のものにするものである。現代を生きるわれわれにとって、水の癒しは必要である。というのは、自分の中の生きていない部分を多かれ少なかれ誰でも持っているからである。

水の視点をもつことで、われわれの意識にとって恐ろしく否定的にみえるものを、宇宙的次元から、視野を広げてながめることが可能となる。水のイメージと関わることは、その視点を手に入れるプロセスでもある。その意味で、心理療法において、意識の視点だけでなく、宇宙的次元で世界の生成を眺める水の視点は重要であると思われる。

文献

- Anderten,K. (1986) Traumbild Wasser : 渡辺学訳『水の夢』春秋社, 1992.
- Bachelard,G. (1942) L'Eau et le Rêves : essai sur l'imagination de la matière : 小浜俊郎・桜木泰行訳『夢と水—物質の想像力についての試論』国文社, 1969.
- Eliade,M. (1963) Traité d'Histoire des Religions : 久米博訳『エリアーデ著作集第二巻』せりか書房, 1974.
- Hillman,J. (1979) The Dream and the Underworld, Harper & Row, Publishers, New York.
- 平澤猛男 (1999) 『水のふしぎ発見』山海堂
- Jung,C.G. (1944) Psychology and Alchemie : 池田紘一・鎌田道生訳『心理学と錬金術 I』人文書院, 1976.
- Jung,C.G. (1951) Symbolik des Geistes : 林道義訳『続・元型論』紀伊國屋書店, 1983.
- Jung,C.G. (1952) Symbole der Wandlung. Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie.Vierte : 野村美紀子訳『変容の象徴 (上)』筑摩書房, 1992.
- Jung,C.G. (1954a) Mysterium Coniunctionis - Untersuchungen über die Trennung und Zusammensetzung der seelischen Gegensätze in der Alchemie : 池田紘一訳『結合の神秘 I, II』人文書院, 1995.
- Jung,C.G. (1954b) Von den Wurzeln des Bewusstseins : 林道義訳『元型論』紀伊國屋書店, 1982.
- Jung,C.G. (1958) Die Psychologie der Übertragung : 林道義・磯上恵子訳『転移の心理学』みすず書房, 1994.
- Jung,C.G. (1968) Analytical Psychology : Its Theory and Practice : 小川捷之訳『分析心理学』みすず書房, 1976.
- Jung,C.G. (1987) Kinderträume : 氏原寛監訳『子どもの夢 I』人文書院, 1992
- 河合隼雄 (2003) 『神話と日本人の心』岩波書店
- 共同訳聖書実行委員会 (1987) 『聖書新共同訳』日本聖書協会
- 志村忠男 (2004) 『「水」をかじる』筑摩書房.
- 鈴木啓三 (1980) 『水および水溶液』共立出版
- 次田真幸 (1977) 『古事記 (上) 全訳注』講談社
- 吉田敦彦 (1987) 「ゲルマン・ケルトの神話伝説」, 『世界の神話伝説総解説』27-50, 自由国民社
- 吉田敦彦 (1999) 『水の神話』青土社